

交通事故による頭部外傷後に実在語の再帰性発話を呈した1例

塚本 能三*** 今村 和弘***

TSUKAMOTO Yoshimi IMAMURA kazuhiko

要 旨

業務中の交通事故で脳損傷により実在語の再帰性発話 (recurring utterance 以下RU) を呈した重度失語症の1例を報告した。症例は65歳右利き男性、タクシー運転手。本例のRUで出現した語の特徴は車内装備された機材名であった。「痛い」を交えて繰り返すことや、悲鳴(泣き声)を発生し、受傷時の状況を再現するかのように出現することもあった。激しい交通事故という本人にとってトラウマとなり得る体験であっても、RUに出現する実在語は感情語ではなく、事故直前に眼前にあり、かつ意識下にあった機材の名称であったことが特徴的であった。

キーワード：実在語再帰性発話、重度失語症、交通外傷、トラウマ

I. はじめに

実在語によるRUの起源についての解説は本邦でなされているが数は少ない。発作の直前に言われた事柄、あるいは言わんとした言葉、少なくとも発病直前の状況と関係している(大橋1965)ことがいわれている。これに対し発作後に初めて患者が聞いた語句か、あるいは発病後はじめて発した語句がRUになるという捉え方(波多野ら1994)も紹介されている。

しかし、具体例をもつての詳細な報告は本邦では調べ得た限り見当たらない。加えて、交通外傷により生じた再帰性発話についての報告も散見する程度である。

今回筆者は交通外傷後に実在語のRUを呈した1例を経験した。本例のRUの特徴は、受傷直前まで本人の眼前にあった、「メーター」「クーラー」といういずれも車内装備された機材名が出現したことであり、過去の報告例とは異なった現象であった。本例の発現機序について考察を加えたので報告する。

II. 症例

65歳、右利き(血縁に左利きはいない)男性、職業はタクシーの運転手であった。

【既往歴】2004年に脳梗塞(左頭頂葉)を発症するも、後遺症はなく職場に復帰した。

【現病歴】2009年8月の業務中に目的地に急ぐ客の要請に応じてかなりのスピードを出していた。その時にハンドル操作を誤り中央分離帯に激突しN病院に救急搬送され、脳挫傷、多発性クモ膜下出血、顔面骨折、正常圧水頭症と診断、保存的治療を受けた。意識障害が改善した同年の9月よりPT、OT、STのリハビリテーションが開始された。同年の10月のはじめは病棟スタッフなどへ暴言を発する、暴力を振るうなどの活動性が確認さ

れたが、徐々に覚醒レベルが低下した。そこで10月末にLドレナージ術が施行された。覚醒レベルがやや改善して、同年の12月にT病院に転院となった。翌年の4月中旬に再び覚醒レベルが低下したためLドレナージ術に続き、5月にVPシャント術が施行された。翌年の6月に当院に転院しリハビリを継続することになった。

【神経学的所見】当院入院時の覚醒レベルは不安定で、反応を引き出すためには、時に声かけ、揺さぶりが必要であった。ベッド上ではほとんど傾眠状態であった。著しい麻痺はないが、日常生活動作は全介助であった。事故による衝撃で右眼球が眼窩から突出し、整復術が試みられたが右眼は失明状態であった。

【CT画像所見(当院入院時)】両側前頭葉皮質下の右側優位に多数の低信号域を認めた。左頭頂葉、および一部側頭葉皮質下には陳旧性の病巣がみられた。両側前頭葉皮質に広範な萎縮、両側側脳室の拡大も認めた(図1)。

【神経心理学的所見】実在語のRUを伴う重度失語症を認めた。いかなる言語モダリティーを用いてもコミュニケーションは成立しなかった。呼称は困難、音読は漢字、仮名単語とも稀に正答した。復唱は5音節程度の単語で可能な時もあるが、それ以上の音節数の単語や短文は反応しなかった。理解は稀に引き出せる指差し反応で単語レベルでも不良であった。その他の高次脳機能障害は精査困難なため不明であった。T病院では転院当初反響反復言語がみられたということであったが、当院転院時には消失していた。

【RUについて】発語は受傷1ヶ月後よりみられ、T病院では「6」「クーラー」「メーター」「かゆい」「痛い」「ホテル」「1円ちょうだい」千円単位以下の具体的金額などが表出されていたということであった。当院では語の

* 大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科(言語聴覚学専攻)

** 友和会 今村病院リハビリテーション科言語室 *** 友和会 今村病院脳神経外科

種類は「クーラー」「メーター」に限定されていた。2語のうちどちらかのみを反復する、あるいは交互に反復することもあったが、語の使用法に規則性はなかった。ベッドサイドや訓練室で検者が本例に穏やかに問いかけると、穏やかな語気で反復した。2語以外の「痛い」「あほ」は課題やその他の反応を強く求められた時に表出された。時には強い語気で悲鳴を交えながら、受傷時の状況を再現するかのように表出されることもあった。したがって、本例のこれらの感情語は本例の感情を反映していると思われたが、「痛い」は生理的な痛みと結びつくものではなかった。問いかけに対して、直前の復唱課題で表出された語が反復されることがあったが、その場限りで持続するものではなかった。以下に発話例（訓練中で機嫌の悪い時）を示す（[]は検者、「」は本例の発話である。）「歩けましたね？どうでしたか？」「クーラー、メーター、メーター」[「しっかり歩けましたね。」

「メーター、クーラー、メーター痛い！痛い！痛い！」[「しっかり起きてください！お腹すきましたか？」]「あほ！メーター、痛い！メーター痛い！メーター痛い！痛い！痛い！」

【訓練経過】当初PT、OT、STの訓練場面、日常生活場面によらずRUは頻りに観察できた。言語訓練としては、本例に残存する機能を活かし伸ばすために、単語の音読、復唱課題に加え、RUを抑制させるための訓練も取り入れて実施した。ところが課題の遂行を求めると語気を荒げ怒りの感情が高まり、中断せざるを得ないことがしばしばあった。そのため、集中的に訓練を実施できなかった。入院約6ヶ月後には、PTによる平行棒の伝わり歩行や、OTによるペグ操作等もこなせるようになった。しかしSTによる訓練室での言語的課題には全く応じなくなった。そこで課題的な内容は行わず、自由会話を主に問いかけて反応を引き出すことを行った。

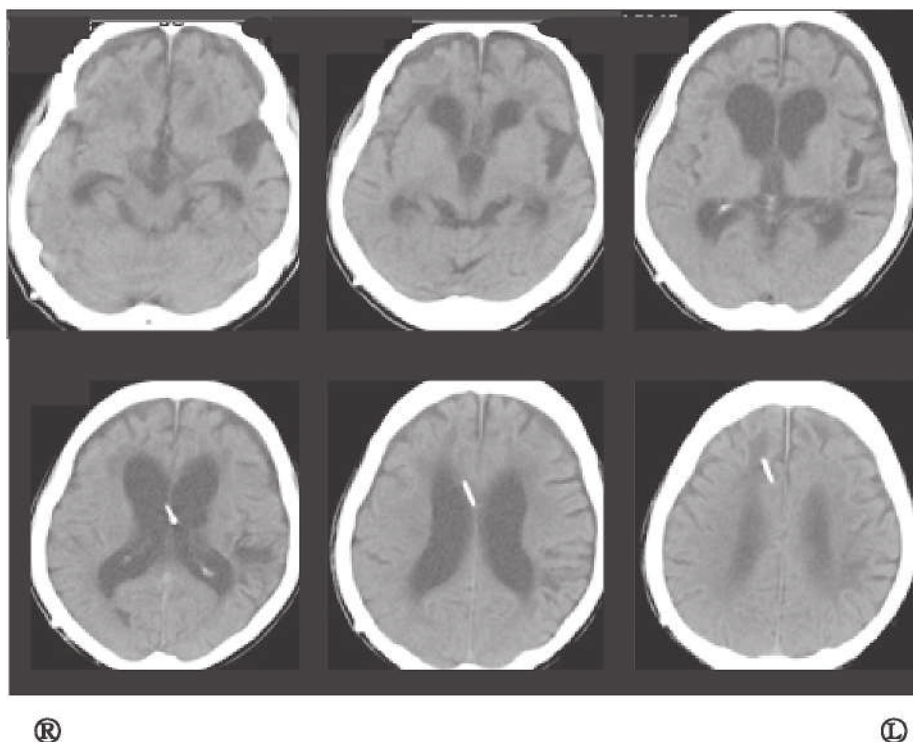


図1【本例のCT画像所見（当院入院時）】両側前頭葉皮質下の右側優位に低信号域を多数認めた。左頭頂葉、および一部側頭葉皮質下には陳旧性の病巣がみられた。前頭葉皮質に広範な萎縮、両側側脳室の拡大も認めた。

III. 考察

1. RUの起源について

Alajouanine (1956) が自験例も含め過去報告された症例を引用し、常同言語 (RU) の起源について詳しく解説している。それを以下に要約する。常同言語の内容に隠れた意義があるのではと疑問を投げかけた第一人者は Jackson である。Jackson は RU で出現する実在

語は、被験者が発症時に伝えたかった内容、意識がなくなる前に考えたであろう患者の表現が語句、文で出現すると述べている。たとえば発症し詰所前の線路の上で倒れた鉄道の信号係員の“come on to me (私のところまで来て)”と時々“come on (来て)”, ロバに乗っている時に発症した婦人の“Gee, Gee (右へ、右へ)”, カタログを作成する多忙な仕事を終えた後発症した店員の

“list complete (リストを完全に)”, けんかで損傷を受けて発症した男性の “I want protection. (守ってほしい)”, などがある。一方, 婦人がタクシーに乗り女性ドライバーに呼びかけた直後に発症し, その時に発した言葉の一部の “missus, missus” がその後も残存したという Gowers の報告がある。すなわち発症直前に言った言葉が出現するという捉え方である。Critchley は Jackson の解釈は Gowers ほど実際の発言と結びついたものではないと指摘し, 2つの症例を示した。1つは酒場でけんかをしているときに卒中を発症し “on the booze. (酔っ払って)” の R U を呈した症例で, 2つ目はいかかわしいモラルを持つ, 魅力的な若い女性が脳出血後に “Not tonight, I am too tired. (今夜はだめ, 疲れているわ)” 以外は言わなかったという症例である。Alajouanine は, Jackson の解釈は Gowers の解釈とは異なり, もっと意味深く, 広い解釈を含むものとして以下の症例を示した。ある作家が朝目覚めた時にベッド上で発症し, “Farewell, the things of this world. (さようなら, この世のもの)” をその後質問に答えるかのように繰り返し続けた。これはその時の切迫した病気の印象を表現する詩的な内容であることがわかる。次は妻が車に同乗しスピードを出しすぎていた夫に警告を繰り返していた。ところが一向に従われず結果事故により妻が脳損傷を受け “Ai bien dit (Indeed I told you so) (私がそう言ったでしょう)” という常同言語が残存した1例である。その他に接客中に発症し “The customer, the boss, the customer, this evening. (お客さん, 店長, お客さん, 今夜)” という肉屋の店員の症例, 新年の葉書を嫌々ながら多数書き終えて発症した “Must write, must write (書かなくては, 書かなくては)” の症例, 校舎の屋根の上で発症した “School, school (学校, 学校)” が残存したかわら職人の症例がある。と述べられている。

以上のことから R U として現れる実在語は少なくとも発症直前に実際に口頭表出した内容に限らず, その時の患者の内的, 外的環境が影響していることが考えられる。たとえば, 作家の “Farewell, the things of this world.” は発症して強まる症状を感じながら自己の状況を持ち前の表現力で咄嗟に表すという内的な影響が考えられ, かわら職人の “School, school” は発症した場所が学校であったことから, 発症直前の自分が存在する外的環境が影響していると考えられる。

2. 本例の R U について

本例の場合目的地に急ぐ客に応え, かなりのスピードを出していた。そして何らかの理由により, ハンドル操作を誤り中央分離帯に激突した。ハンドル操作を誤った段階で, 誤った進路, 速い速度など総合的な判断がなされ先に待ち受ける結果が本人には察知できていると推測

できる。さらに, 恐怖心, 業務中という責任(客への配慮), あるいは事故後のことなど様々な精神活動がわずかな時間でなされたかも知れない。結果, 眼球が突出するほどの顔面骨折を伴う脳挫傷という激烈なけがにより意識が消失した。本例にとって, 意識が消失する直前の表出語として考えられるのは, 「恐怖あるいは, 救い」に関する用語であり, それらの語が R U として出現する可能性は十分考えられる。

ところが, 本例の R U として表出された実在語は「メーター」「クーラー」であった。「メーター」は歩合制の給与体系がとられているタクシー運転手にとって, 重要なアイテムであり, 業務中にあつてはいつも意識が向けられていた機材であるといえる。しかし, 受傷直前に口述したとは考えにくい。次に「クーラー」である。事故当時は8月の夏, 車内ではクーラー(エアコン)が作動されていたことが推測される。適温を維持するためにそれなりに意識が向けられていた機材である。しかし「メーター」同様に受傷直前の口述については考えにくい。以上のことから, 「メーター」「クーラー」はいずれも車内装備されており, しかも受傷直前まで本人の眼前にあり, かつ意識下にあった機材の名称であるということがわかる。しかし, なぜ「クーラー」「メーター」なのか? 事故当時, 本例の眼前には「ハンドル」もあるし「バックミラー」, その他機材もある。考えられる可能性としては受傷直前の意識あるいは関心の入り方の強度によるものではないだろうか。

波多野(1994)は質問が変わっても同じことを発話する「垂直性」の反復が R U であるとしている。本例の「痛い」「あほ」は感情が高ぶった時, たとえば, 強く反応を求められた時などに強い語気で表出された。「痛い」は壮絶な事故時に本例が受傷し意識消失するまでの間, 体感し叫んだかもしれない。しかしいずれの語も興奮した時にだけ表出され, 突発性であり「垂直性」に反復しなかったことから R U としては捉えにくい。注目すべきは Jackson が引用した, 鉄道の信号係員, Critchley のけんかで損傷を受けた男性, 酒場でけんか中に発症した男性, Alajouanine の嫌々葉書を書き終えて発症した女性, 学校の屋根の上で発症したかわら職人の症例である。これらの症例も本例と同様に, 発症, もしくは受傷時に感じたであろう痛み, 恐怖, 疲労など感情を表現するような語句が R U として表出されていなかった。中でも学校の屋根の上で発症したかわら職人が発した「学校, 学校」は外的環境の実在語が表出されたことから本例に近いのかも知れない。咄嗟に感じ表出される感情語はより自動的であるが故に R U として残りにくいという可能性も考えられるのか, 今後さらなる症例の蓄積を待ちたい。

引用文献

- 1) 大橋博司：臨床脳病理学 医学書院. 東京 p .23,1965.
- 2) 波多野和夫, 広瀬秀一, 中西雅夫, 他「反復性発話について。」失語症研究 14 (2) 140-145, 1994.
- 3) T.Alajouanine. (1956) Verbal realization in aphasia. BRAIN , vol.79pp.1 -28.
- 4) 波多野和夫：「反復性発話をめぐる諸問題 (1)」— その失語学と精神工学的意味について—精神医学 31 (4) 336-343,1989,
- 5) 波多野和夫, 松田芳恵, 堀川義治, ほか：「クレシェンド現象と言語反復症状を主徴とした外傷性痴呆の一例」—頭部外傷後遺症言語症候論補遺— 神経心理学, 4 (2) 108-117, 1988.